

教育における身体の読み解きの技法について

杉 山 英 人

千葉大学・教育学部

On Technique of Understanding of Body in Education

SUGIYAMA Hideto

Faculty of Education, Chiba University, Japan

身体は日常生活における多様な経験（習慣）を通して文化性を内在化しているが、学校生活においても運動部集団や体育授業での経験だけではなく、日常経験を通して学校文化が身体化されている。そのため、教育における身体は教育対象としてだけでなく、教育活動の基底であるとともに、子どもの理解のための不可欠な契機としても機能しているといえる。この意味で身体を読み解くことは教師一般に求められる重要な役割となる。そこで本稿は数値化されえない「生身の身体」の捉え方およびその読み解きの技法について、歴史、スポーツ、学校、看護における具体的な成果を確認することを通してそのあり方を考察することを目的とする。

Body internalizes culture through variety of experience in daily life and school culture is embodied in daily school life experience including school athletic club activity and school physical education class. Therefore, body in education is not only the object of education but the foundation of educational activity and is the essential factor of understanding student. In this sense understanding of student's body is teacher's necessary role in general. This paper considers the idea of technique of understanding of living body not to be quantified through tracing main works of this theme in history, sport, school, and nursing.

キーワード：生身の身体 (Living Body), 読み解きの技法 (Technique of Understanding)

1. はじめに

身体が重要な教育対象であることから、その教育が学校体育制度として保障されているが、そこでは小学校から高校まで一貫して「心と体」が「一体」と捉えられ、運動実践という直接的な身体経験が身体の総合的な「学びの場」となることが目指されている。運動教材としてのスポーツについて確認すると、スポーツが文化である以上、スポーツ実践は文化実践となりその文化性は身体化されることから、それぞれのスポーツ経験により固有のスポーツ観が形成され、それが思考や行動に影響を与えることになる¹。例えば運動部集団に対する批判として、いわゆる「体育会系」という思考回路・行動様式が指摘されることがある²。あるいは、スポーツ実践での「運動能力・技能」「体力」「記録」「勝敗」等に関わる身体の序列化を連想させるような身体経験に由来するスポーツに対する否定的感情もある。それらの変容のためには、それまでのスポーツを巡る身体経験とは異質で新たなスポーツ経験が必要となる。その一つの可能性として学校教育でのスポーツ経験は重要な場となる³。

また、身体経験はスポーツ等の運動実践に限定されるものではなく、日常生活での経験も無意識に身体化され、「身体の文化性」⁴を形成している。その典型例として躰がある。躰は当該文化圏で求められる倫理性の身体の扱

い方を通じた獲得となるが、日々の習慣を通して身体化されるため、日常生活において意識化されることはほとんどなく、その変容は極めて困難なものとなる。そのため、そのような無意識の身体化された文化性が排他的ではなく、それとは異質な文化性に対して柔軟に対応するためには、身体への意識化を通じたその変容が求められる。このことは学校体育として制度化されているこれまでの「体育 (physical education)」に対して「身体教育 (body education)」あるいは「教育における身体性」という視点の重要性を示唆している⁵。

このように身体は日常生活における多様な経験（習慣）を通して文化性を内在化しているが、学校生活においても運動部集団や体育授業での経験だけではなく、日常経験を通して学校文化が身体化されている。そのため、教育における身体は教育対象⁶としてだけでなく、教育活動の基底であるとともに、子どもの理解のための不可欠な契機としても機能しているといえる。この意味で身体を読み解くことは教師一般に求められる重要な役割といえる。そこで本稿は数値化されえない「生身の身体」の捉え方およびその読み解きの技法⁷について、歴史、スポーツ、学校、看護における具体的な成果を確認することを通してそのあり方を考察することを目的とする。

2. 文化的・社会的・歴史的産物としての身体⁸

まず、身体が文化的・社会的・歴史的産物であること

連絡先著者：杉山英人 hidetohsk@faculty.chiba-u.jp

を池上俊一(2001)『身体の中世』(ちくま学芸文庫)⁹を手がかりに確認していく。本書は「からだところからヨーロッパ中世を見なおす」試みであるが、そこには二つの意図がある。一つは「生身の人間、日々の生活の中で、喜び悲しみ、泣き笑い、夢をみ絶望し、そして老いて死んでいった人間に可能なかぎり即して、その時代と地域の特質を考察する」ことであり、もう一つは「身体や感情に刻み込まれた知や迷信やメタファー(隠喩)を媒介として世界に投げかけるメッセージと、それにたいする世界からの応答をうけとる感性の独特の様式、それらを鏡として、ヨーロッパ中世社会の深奥に秘された謎を解説しようというもくろみ」である(p. 9)。このように本書はヨーロッパ中世の身体を通して「ヨーロッパ中世の深層」を読み解く試みであるが(p. 11)、「こころ」も取り上げられているのは「思考能力ではなく、からだの状態に直接つながり、からだと相互に影響しあう感情の表現と、感覚・知覚のあり方」に着目するからである(p. 228)。

また、「生身の人間」が強調されるのは、「あたかもわたしたちとおなじような身体と感情・感覚のあり方をもつ「一般的人間」ないし「抽象的人間」を想定し、本来異質である時代や地域の文化的習慣や社会関係を論ずることを避けるためであり、「人間だれしも例外なく、偶然生まれたその時代・地域の文化的習慣や社会関係の網の目に否応なく巻き込まれ、成長の過程で、彼の身体と感性には、それらの跡が日々たたままれてゆくことになる。だから、身体も感性もすぐれて歴史の産物なのである」ことから、「身体と感性」をもった「生身の人間」は「歴史の原形質」と捉えられる(p. 10)。なお、ヨーロッパ中世の特質として、「他のどの時代にもまして身体を媒介として世界とかかわった時代」、「身体についての知識やメタファー、あるいは身体に課された規制、それを操るイデオロギー、そして過度な感情表現や様式化した儀礼的身振りが豊富な世界」そして「女性・病人・障害者にたいする差別が自明視された社会」が指摘される(p. 11)。

本書の構成を確認すると、「I 身体コミュニケーション」「II 身体に関する知・メタファー・迷信」「III からの〈狂い〉とところの〈狂い〉」で「からだ」が、「IV 感情表現の諸相」「V 五感の歴史」で「こころ」が考察される。

「I 身体コミュニケーション」では、「身振り、ダンス、スポーツ、衣服とモード、化粧と変装」から「ヨーロッパ中世の身体のコミュニケーションとそれらに授けられた意味」が読み解かれる。「社会的記号」としての「からだの動き」の時代的变化の特徴として、十二・十三世紀の「身体コミュニケーションの合理化による抑圧」への強化から中世後期での「感情生活に適合した身体コミュニケーション」の発展である「派手な身振りやエロチックなダンス、目まぐるしく変わるモードや厚化粧、美しい肉体を作るスポーツ」への肯定的評価が指摘される。このような現象は、「禁欲倫理の桎梏からの脱出であり、人間性の謳歌だとも見える」と捉えられた上で、それがどのような意味を持つのかということが問われる(pp. 83-84)。その過程を確認すると、「1 身振りのシ

ンボリズム」(pp. 15-32)において、「身振り」は無意識に体得される文化固有のものであるとともに、「社会的記号」(「身分・団体・職業固有の身振り」)として、「連帯性」の強化と「部外者」に対する「排除・差別」という機能を有するものと捉えられ(p. 15)、その評価規準は「人間の内面と外面の二元論」であり、身振りは「魂、あるいは内的人格を表現し、その状態を外部に、つまり身体の動きとして表現するという考え方」であったことから、「抑制された秩序立った身振りは、魂の美しさや積まれた美德の数々を表現する」と評価されるのに対して、「混乱し無秩序で、過度であったり、ひきつったりだらしなかつたりする身振りは、秘められた虚栄や罪・悪徳を開示する」とされ、「魂と身体」は「作用と反作用の記号の網の目」の中にあるため、「魂の運動は、身体の運動として外部に示される」と評価されることになる。そしてこのことは逆方向の教育の可能性につながり、「逸脱した身振りを矯正・訓育することが、内的人格を改革する良き方法として、教会指導者によって推奨」されることになったとされる(pp. 16-17)。

そして「日常生活でも多くの場面で、儀式化し慣習化した身振り(身体技法)があふれていた」中で、教会は「呪うべき身振りと褒めたたえるべき身振り」を明確に分類した上で、「身振りによる過度な感情表現を戒め、身振りを統御することをつうじて信徒たちのこころを統御する道を選び、そのための規範を練りあげていった」ことが指摘される(p. 32)。「スポーツ」を事例に確認すると(「3 スポーツの熱狂」pp. 47-56)、「スポーツでからだを動かし鍛える。何のために？」(p. 47)という基本的問いに基づき、社会におけるスポーツの位置づけから社会の変容・特質が読み解かれるが、このような「身振り」と「魂のあり方」の連関から、「激しい動きを伴うスポーツは、魂を落ち着きなく動揺させ、安定した美德の形成、ひいては秩序ある社会の建設に背馳する」という「否定的スポーツ観」が形成され、「身体を鍛え、筋肉をつけ、活力を増進させ、こころをリフレッシュさせるという効用は、スポーツにたいしてまったく与えられなかった。」とされる。それはスポーツがその内部規則に基づいた実践であっても、「規律正しく拘束され、抑制された身振り」とは認められなかったためであり(p. 54)、評価規準として「〈聖なる〉からだ」と「〈穢れた〉からだ」(pp. 94-107)に関わる「禁欲的霊肉二元論」が設定されていたことによる。そのため、スポーツは「ディシプリン、鍛錬」とは関係づけられず、スポーツを職業訓練として重んじた騎士階級も「美しく均整のとれた肉体」あるいは「こころ・人格形成との結びつき」を志向していなかったとされる。「スポーツはからだを形成し、その形成がこころを善導するという考えの道筋とは無縁であった。スポーツに娯楽以上の意味があるとすれば、それは、陽気な儀礼であり、社交の道具ということであった。」(p. 55)これが当時の社会におけるスポーツの有り様とされる。

このようなスポーツ観の転換が、「知識人がスポーツを積極的に評価し、全人教育の構想をはじめ」というルネッサンス黎明期の「人文主義者による復権」であり(p. 55)、そこでは体育やスポーツが「人間の全人教育、人間のあらゆる側面の調和のとれた発達追求を目指す

ヒューマニズム教育の大切な一環と評価され、そして「こころとからだ、魂と身体の二元論を克服する論陣」が張られることになり、「均整のとれた美しいからだの発達が、体育・スポーツによってもたらされ、身体の自己鍛錬が自堕落や無気力を予防する」ということが「人文主義者らの体育の「指導要領」となったとされる。その一例として宮廷学校における競技場の建設があげられる (p. 56)。そしてこのような身体に対する積極的評価は、この規準から逸脱した身体への否定的評価ともなる。なお、からだの装飾として「衣服と化粧」が取りあげられ (「4 衣服とモードの文化史」pp. 56-69)、「この時期に初めて明確に男性ファッションと女性ファッションが分化し、男は男らしい衣服、女は女らしい衣服を追求した」ことが指摘されるとともに (p. 60)、建築様式との並行関係で「ファッションとしての衣服の前に、スタイルとしての衣服があった」ことから (p. 62)、「わたしたちが世界に視線を注いで、解読しようとするとき、そこにはかならずスタイルが必要不可欠な意味の解説装置として立ち現れる」ことが着目される (p. 63)。

「Ⅱ身体に関する知・メタファー・迷信」では、「中世のからだは、一方ではさんざんにおとしめられながらも、他方では宇宙や世界と感応し共鳴して、現代よりもはるかに大きな存在の権利を主張していた」とされ、「身体は精神の僕ではなく、精神の母であった。いや身体は精神そのものでさえあった」という「身体把握の特質」が描き出される (p. 86)。つまり「中世人のからだ」が、「メタファーやシンボルの劇場」であり、「からだについてのメタファーやシンボルの分節とその表す意味」は、「からだを観念するイデー」(科学的伝統・革新の由来、民族的な信仰の産物)、「からだを政治的・社会的な権力行使の道具として活用しようとするイデオロギーの種類」(教会、帝国・国家、宮廷)、「それらの間の力関係」、さらには「現実のからだの中におかれていた社会関係や価値体系」により時代の進展とともに変化していくことが示されるとともに、からだが「能動的な作用」も備え、「内と外との、かならずしも単純ではない関係」に巻き込まれていたとされる (pp. 173-174)。なお、「3 医学と民間療法」(pp. 107-115)の「職人としての外科医」(pp. 111-114)との関連で、その対象としての身体が「神秘的な後光をすでに失ったあくまでも「世俗的」な身体」であり、「人体解剖」が「それまで人間とその身体が、世界(マクロコスモス)との間にもっている想定された神秘的な関連を、一刀両断した」ものであったことから、「完全に世俗的・物質的な身体」が誕生することで、「世俗的身体観」が成立したことが描き出される (pp. 114-115)。また、「4 清潔感と衛生管理」(pp. 115-121)では、「身体の清潔」が「他人の目に触れるところ、具体的には顔と手の清潔であり、自分のためではなく他人のため、他人の視線に向けられた行為・状態」であり「一種の社交的行為」であったとされる (p. 119)。

「Ⅲからだの〈狂い〉とこころの〈狂い〉」では、「異常」に関する一般的な観念や態度は、「正常神話」や、それを支えている宗教的・社会的イデオロギーと不可分に連関している」ことから、「異常」の考察は、普通では見えない「正常」の秘密を浮き彫りにしてくれるという

長所がある」ということ (p. 176)、即ち「異常についての考え、取り組みは、正常とは何か、あるべきからだとこころの姿はいかなるものか、という判断基準をひときわ露にする」(p. 364)という基本認識に基づき考察が進められる。そして「からだやこころの異常が論じられる際に、神と悪魔という二つの超自然力の源泉と身体や魂との関連、そしてそれらの力と人間の人為的な力とのかわり、また、「自然」とは何かという問題、さらには人間の内の身体と魂の相互連関などが、つねに問題とされた。したがって、それらについての観念が変われば、からだやこころの狂いについての考えも大きく変化する」ということが描き出される。具体的には、「中世初期においては、…、からだやこころの狂いは、いつも超自然との関連の下で捉えられていたが、十二・十三世紀以降、明確化した自然と理性の概念をテコにして、それらの狂いは、とり込みと排除の分類規準をあてがわれて社会化してゆく」ことが示される。ここの注意点は、「この合理化と社会化」が、「狂ったからだやこころの持ち主にとっての幸せや、人々のかれらへの親切な態度とは、さしあたり無関係」であり、「社会の仕組みや権力構造を固め守るための、そしてその「勝ち組」が個人的・集团的アイデンティティーを確認するための、運動の一局面であった」ということである (p. 226)。

「Ⅳ感情表現の諸相」では、「感情の様態は、何よりも社会関係によって規定されていた」ことが跡づけられる (p. 365)。「2 嫉妬と羞恥・人間関係が生み出す情動」(pp. 242-258)についてみると、「これらがきわめて「社会的」な感情であり……、かならずや対人関係、あるいは社会関係の中で生まれ、そしてその人間関係のあり方におうじて、発現の形態も決まってくる」こと (p. 242)、そこでは「他人の視線」が決定的役割を担っていたことが指摘される (p. 258)。「神との内的な対話であった中世の沈黙」の近世における「社会化」については、「私的領域」の「社会化」とそれとは対照的な「公的空間」の「ゆるやかな個人化(個性化)」の過程と捉えられる (p. 294)。そして感情と容易に結びつくと考えられる「表情」も、「表情を意味づけ評価する価値体系」がなければ機能しないとされる (p. 295)。

「Ⅴ五感の歴史」では、五感(視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚)は「それぞれ独立して機能するもの」であるが、相互関係の中でそれらのもつ意味が理解されるとともに、五感の世界からの情報の受信や世界の意味づけと分節・構造化がすぐれて歴史的問題と捉えられる。「視覚」についてみると、十二・十三世紀以前の「触覚と聴覚」にリードされた五感相互の協力関係)に対して、十二・十三世紀の「視覚」の台頭による「五感の布置」の変化とルネサンス期の線遠近法と印刷技術の発明によるその飛躍の結果、「世界は視覚支配に服す均質化された統一的・連続的世界となり、主体たる人間と完全に分離され、人間の世界との一体感が失われてゆく」こと (p. 358)、つまり「視覚の機能」が「合理的・連続的・線的な空間把握」による正確な知覚を可能とする一方で、「生命の根源」から遠ざかることが指摘される (p. 366)。

このように「身体と感性」は「人の育った風土・社会関係・文化の様態など」によって形成され (p. 360)、

身体に関わる観念も文化様式や生活様式に基づきそれぞれ独自に形成されることになるが、それは当該集団内で固定的に形成されるものではない。例えば教会独自の身体観は「初めから一枚岩としてできあがったものではなく、やはり世俗的そして民族的な身体観と対峙しつつもそれをとり込み、また、融合しつつ変化・発展していった」ということに示される (p. 362)。また、中世人の身体については、「身体をつうじて世界を把握することに慣れていた」こと、そして「精神的であり、能動的であった」こと、「メタファー」に溢れていたことが指摘され、身体「メタファー」が「身体を世界と結ぶ絆」であり、その活動の場が「外面と内面の境界」にあり、「意味する外面と意味される内面をつないでいた」とされた上で、「外面と内面」の関係性が問われる。形式上は「肉体が外面で魂が内面」となるが、両者の関係性は「「順接的」関係」と「逆説的」関係」の相互関係にあり、「外面」には「それをおおう衣服や化粧」も含まれ、「外面の作用が内面に影響をおよぼし、内面の状態が外面に反映する、との両ベクトルの運動」にあり (p. 363)。「中世の身体」は「展示性・顕示性が著しく、これは社会関係の網の目と、交差する他者の視線に捕らえられぶら下がった身体」とされる (p. 364)。

そしてからだもここも「その人の生きている文化や社会の価値体系や、仕組みと密接にかかわっている」ことから、「人間をとり囲むイデオロギーやイメージこそ、からだやところを作ってゆく」ことになる (p. 367)。「生まれ落ちたとたん、他者の身体と向きあうことになるわたしたちが、自分の身体を理解するのは、他者がわたしの、あるいは他者自身の身体を理解する、そのやり方をわたしたちが学ぶことによってなのだから、そこには文化と社会が媒体として入り込んでくるのである。」そのため、「身体」とは単なる「生物学的身体」ではなく、「文化的・社会的産物」であり、「歴史の産物」となる (p. 393)。この意味で身体を読み解くことは、「その人の生きている文化や社会の価値体系や、仕組み」、即ちその社会の特質を読み解くことに他ならず、「からだ」を基点に社会の特質や人間の存在様態を読み解くという「方法としてのからだ」という方法論の重要性が理解できる。

これまで「ヨーロッパ中世の生身の人間」(p. 367)という「歴史としてのからだどころ」(p. 393)の読み解きを具体的に確認してきたが、「キリスト教の倫理的リゴリズムを克服し、人間の自由と解放をもたらしたかにみえた世俗社会における文明化自体が、人間性を抑圧する」という指摘は (p. 367)、「身体のあるべき姿」の模索のためにも重要な論点となる。この点については、現在の日本人の身体を巡る社会状況として、抗菌・除菌・消臭、栄養ドリンク・ビタミン剤での栄養補給、アレルギー・生活習慣病の増加、身体存在感の希薄化、暴力的身体出現等があげられ、遺伝子操作・クローン技術・臓器移植・人工臓器の誕生等により「人間の生とは何か、死とは何か、わたしのからだとは何か、があらためて問われている」という基本的問いが提示される (pp. 392-393)¹⁰。

3. 「方法としてのスポーツ」

現代における身体の一つの典型的社会現象であるスポーツに焦点を当て、「方法としてのスポーツ」という明確な方法論から現代社会の特質を「身体」「資本」「ナショナリズム」として描き出しているのが、多木浩二 (1995)『スポーツを考える：身体・資本・ナショナリズム』(ちくま新書)¹¹である。その基本認識は、「今日のスポーツのさまざまな様相を社会が生みだしたものと、その原因を社会的要因に求めるのが普通であるが、ほんとうは反対に社会の方がスポーツに可視化され、人間性を顕現化せしめる形式のひとつになっているのである」(p. 150)というスポーツによる「社会の可視化」(p. 94)となる。「序章 方法としてのスポーツ」の「1 スポーツと社会」では、両者の関係の一例である「アマチュアリズム」について、「長年、スポーツにおいて普遍的な価値をもつと思われてきたアマチュアリズムなる美德にしても、スポーツを生みだしたイギリスの特権的なジェントルマン固有のイデオロギーであり、感情であった」ことが指摘される (p. 9)¹²。そしてスポーツと社会の基本的関係は「もともとスポーツという概念は、発生の時から観客を含めた社会(社交)のなかで成立してきた」ものであり、「観客として味わうエキサイトメントに、スポーツの社会的、文化的本質が含まれている」と捉えられることから、スポーツに熱狂する状況に関して、「なぜ、人はスポーツを観るのか？」という問い自体が誤ったものとなる (p. 10)。

また、今日のスポーツを巡る「言葉やイメージの氾濫」は、「スポーツがプレイヤーの実践だけではない社会的現象」であり、「社会には不可欠のもの」となっていること (p. 11)、即ち「社会的表象」(p. 191)であることを示すものとなる。その典型例として、メディアにおいてスポーツが日常的なニュースとなっていることがあげられるだけでなく、それが「無害なエンターテインメント」として位置づいていることに注意が向けられる (pp. 10-11)。現代社会ではメディアというスポーツを巡る多様な言説を通してスポーツに関わることになるが、そのスポーツは「幾重にも修辭的な回路を経ている」ことの認識が重要となる (p. 21)。「スポーツというのは不思議な対象で、それ自体は完全に身体的でありほとんど知的営為とは言えないが、はじめから社会的な出来事だから、さまざまな知的関心を呼び覚ますひろがりがあった」(p. 170)ということから、スポーツは「知的探求の対象」(序章2)となる。そして「今、スポーツになにを問うのか」(序章3)という問いが提示される。

本書ではスポーツの変容が3段階で捉えられている。概略すれば、「文明化の過程」により「競争の非暴力モデル」としての「近代スポーツ」がイギリスに成立し、オリンピックを通してその理念が普及する(「第一章 近代スポーツはなぜイギリスで生じたか」「第二章 近代オリンピックの政治学」)。次に、「スポーツのアメリカナイゼーション」(第三章)により「大衆社会での文化の享受の仕方」としてスポーツという身体文化が日常生活に位置づくことになる (pp. 80-81)。近代スポーツとの質的相違としては、「自らがひとりの禁欲的なエリート

たろうとするこれまでのスポーツ……から、自分ではないが身近なヒーローへの同一化をはかる個人的感情と集団の心性という二重性を持った観客」の形成が指摘されるが (p. 88), 大衆は参加者としてもスポーツを享受することになる。「大衆は参加者としてまた観客として、スポーツとのかかわりをもつことで、日常的活動を補完しているもうひとつの活動を生みだし」(pp. 94-95), 大衆消費社会において「スポーツを日常的に消費しはじめた」とされる。そして「スポーツの消費とは、そこから生じるエクサイトメントの消費であり、物語の消費であった」とされ、その特質が「読書や芸術のように知的な苦勞なしで消費できる娯楽」に求められる (p. 97)。そして「メディア」が不可欠の要因として機能することで、「アメリカのスポーツはメディアとともに発達していく」ことになり (p. 98「2 消費されるスポーツ:あるいは社会の可視化」), 「メディアはスポーツを言説化するが、その言説は質、量ともにエスカレート」し (p. 190), その結果、「スポーツはメディアに媒介された情報の集合から生じる巨大な力にのみこまれてしまった」という状況がもたらされる (p. 138)。このことは、スポーツをみることの質的相違と密接に関わる。メディアを通してみることは、「スポーツをメディアが構成する言説として受けとる」ことであり (p. 196), それはスポーツが「記号として消費される身体のパフォーマンス」であることを示すものとなる (p. 198)。この意味で「スポーツの変容は、スポーツ自体にあるというより、スポーツを言説化するメディア社会のなかにある」とされる (p. 199)。ここに「消費」と「蕩尽」という視点の重要性を指摘できる (「終章 理想は遠くに」「3 消費とエクスタシー」pp. 194-200)。なお、第三章以降のタイトルが「近代スポーツ」ではなく「スポーツ」とされていることが示唆しているように、「スポーツのアメリカナイゼーション」というスポーツの現代的形態の誕生を大きな契機として、「アマチュアリズム」のような「近代スポーツ」の理念は大きな変容を余儀なくされ、「スポーツ」に新たな社会的価値が付与されるようになる。

「三度目のスポーツ革命」とされる「女性の登場」(第六章)は、近代スポーツの成立基盤である「禁欲的なエリート」(p. 88), 「マンリネス (男らしさ) のイデオロギー」(p. 140)が、「ヴィクトリアンの男性紳士の道徳」であり、「男性身体を基底に据えた「虚構の理想」」(p. 155)であるという「スポーツの概念が男性の身体を核にして構成されてきた政治的無意識」を明示し (p. 160), 「かつて (無意識化されたまま) 男性中心に構成されてきた身体文化というものが無化され、もっと別のコンテキストの身体文化のなかでスポーツがあらためて考えられねばならなくなった必然性」を示すものとされる (p. 170)。この点については、「身体が核となって生成される文化は、当然、性の差異を含み込まないわけにはいかない」とされた上で、「性差を超えてスポーツを捉える言説の枠組み」(p. 164), 即ち「性の多様な様相を含んだ身体文化への視野」(p. 170)の必要性が指摘される¹³。そしてその方向性が次のように提示される。「身体文化が変化するのは、性の差異の様相が変化しはじめるときである。あたらしい身体文化が生まれるとすれば、この

差異が差別ではなく、別の組み合わせ、エロティシズムの可能性などにひらかれたしなやかで豊かな関係になったときでしかない。」(p. 165) また、「ファッション」があげられ、「服装に気をつかう」ということは「自分を公共の世界に身体的に出現させる方法に気をつかうこと」とされる (p. 165)。先にも確認したように服装も身体表象であり、身体を読み解く際の重要な要因といえる。なお、「身体の多彩な関係を生み出す仕組みを示すこと」(p. 166)になる「あたらしい身体文化」(p. 161)としてダンスの可能性が指摘される (pp. 162,166-167)。

このようなスポーツの変遷の中で「スポーツの身体」は基本的には「従順な身体」として「規律・訓練」を通して育成されることになるが (第一章「4 スポーツと身体」pp. 44-49), スポーツのスタイルは「日常の身体感覚に見合ったもの」, 即ち「われわれの時代のスタイル」といえることから (p. 133), 「スポーツの身体」はその時代の「身体」の特質を表したものと理解できる。この意味で「競技者の身体」に関わる「ドーピング」(第五章「2 ドーピングと身体」pp. 140-146)は現代社会の特質としての「過剰な身体」(第五章)の典型例であり、それは「身体にドーピングさせる過剰な力」が「現代の社会を貫いている」ことを示すものとなる (p. 142)。そのため、ドーピングは「近代スポーツのイデオロギーの中心にあった身体観が内部から崩れ始めた証拠」であり、「ある種の過剰な力が身体を貫きはじめた」ことの現れとされ、その背景として「身体への異様な配慮が、健康を通り越して身体の形状へと移行しはじめたこと」が指摘される (p. 145)。このように現代の「スポーツの身体」は「近代スポーツ」の理念を超えて、「規律・訓練を離脱する身体」(第五章3, pp. 146-152)となる。そして「競技者が過剰なまでに身体能力の強化に熱中していく環境を構成している」要因として、「デジタル化したスポーツ」による「極限的な差異の競争」と「スポーツが観客を消費者としてもつビジネスとなった」ことが重要となる (p. 98)。このようなことから、ドーピングはスポーツ (特に競技スポーツ) 内部の問題ではなく、社会における身体観の問題であり、「たんにドーピングの可否というスポーツでの問題以上の重要な問い」として、「身体とは人間にとってなにかという分かりきったようでいて分からない問い」を示すものとなる (p. 147)。その背景には、「もっとも決定的な「生と死の境界」の定義が曖昧になった現在、人間的、社会的に身体概念がきわめて不確実になった」という時代状況がある (p. 148)。

「スポーツの身体」の表象は現代の身体観を示すものといえるが、その際「記号」が重要な視点となる (「第四章 スポーツの記号論」pp. 107-130)。「スポーツの身体」は物質を生産するのではなく、記号=情報を生産する。スポーツのアルゴリズムが生じる。さまざまな身体の神話とともに記録という情報を生み出すのである。……スポーツとは記号の場に、身体能力から性差を含む社会的矛盾までを描き出す表象活動」となる。「スポーツの身体」が生産する「記号=情報」の典型例としては、チームや個人の能力・強さに関わる記録、採点、得点等の「デジタル化」や「デジタルの差異」があるが (pp. 185-

186), このことは、「欲望はつねにそれが言説化された状態で社会を構成しているのである。……こうした言説による社会のなかで、やはり社会的表象たるスポーツはどのような位相を占めるのか」という問題意識となり (pp. 191-192), 「欲望の表象とスポーツ」(終章 2) という視点の重要性に関わる。このようにスポーツを読み解くということは、「スポーツの身体」が生産する「記号=情報」に関わる「幾重にも修辭的な回路」を経た言説を読み解くことを通して現代社会の身体の状態を浮き彫りにするという「知的探究」となる。

4. 学校の身体: 「学びの身体技法」

身体を基点に学校における子どもと教師の存在様態の読み解きを徹底し、「学びの身体技法」の重要性を説いているのが佐藤学の一連の研究となる。『学び その死と再生』(太郎次郎社, 1995, 以下ページ数のみ記載), 『授業研究入門』(稲垣忠彦・佐藤学, 「I 授業という世界」, 岩波書店, 1996), 『教育方法学』(岩波書店, 1996), 『カリキュラムの批評: 公共性の再構築へ』(世織書房, 1996), 『学びの身体技法』(太郎次郎社, 1997, 以下『技法』と記載), 『教師というアポリア: 反省的实践へ』(世織書房, 1997), 『学びの快楽: ダイアローグへ』(世織書房, 1999) 特に『学び その死と再生』と『学びの身体技法』を中心に「学び」における身体という論点を確認していく。

「学び」において身体が重視されるのは、「授業は、生身の人間が生身の身体を投入して生身の言葉を交換し合っていると込まれている」と捉えられるからである(『授業研究入門』p. 74)。そのため、「学び」の問題の根源が「学び」からの「身体性」の排除に求められ、「どんな知識も学び手の身体的な活動に具体化され、学び手の経験のなかに織りこまれること」、即ち「学びにおける身体性の回復」が重要となり(『技法』pp. 19-20), その再生の方法論が「学びの身体技法」となる。その一例として「言葉の身体性」、即ち対象と「身体との生々しい関係」からの「身体感覚に生まれる言葉」があげられる(『教師というアポリア』pp. 344, 347, 352)。

そして「学び」の成立要件が「〈出会い〉と〈対話〉」という身体経験に求められることから(『技法』p. 25), 「学び」は「モノや事柄との〈出会い〉と〈対話〉」を構成する身体技法として具体化される」ことが重要となる(同書, p. 37)。「勉強」と「学び」との決定的ちがいも「対話」の有無に求められ、それは知識と情報の相違となる。「学び」での「知識」は、「学び手が経験を基盤として意味を構成する認知的活動の所産」であり、「人称関係と媒体と経験と文脈」の内在化とされる(同書, pp. 91-92)。また、「学び」と「学力」の相違は、「学び」が「個々のいとなみの「経験」」であり(同書, p. 98), 「教育経験の一回性」(同書, p. 101)として機能するとされるのに対して、「学力」は「学び」の「結果」の集合であり、一般化による個々の経験の抽象化となるため(同書, pp. 98-99), 「想像的表象」である「貨幣としての学力」として機能するとされる(同書, pp. 99-102)。

そのため、「主体の内から外へと発してふたたび内へと回帰する「循環(circulation)」」(p. 174)という「いとなみ」(p. 82)である「学び」からの学校の読み解きとして、「制度論的アプローチ」ではなく、「私たち一人ひとりの経験の内側にある学校を吟味し、人生における学校の意味や価値を具体的に問い直して、私たちの希求する学校のイメージを探索する道筋」としての「存在論的アプローチ」が提起される(pp. 24-25)。そこでは「子どもも教師も、それぞれ「理(ことわり)の世界」を生きている」ことから、「どんな誤答も一面の真実を含み、どんな行動も一面の合理的な根拠を含むものとなる」という認識が重要とされる(p. 35)。そして学校制度の「二重の危機」として、「学校教育の「近代化」における量的・制度的な発展過程で包み隠されてきた矛盾がいきよに顕在化したこと」, 「学校の「近代化」の終焉により、自明とされてきた学校の規範性と正当性が揺らぎはじめたこと」が指摘される(p. 51)。これは「公共的領域の危機=居場所と連帯の喪失」(pp. 55-57)による「私事化」とされる。このような危機的状況は、「学ぶ意味」, 「居場所」, 「信頼しうる教師との親密な関係」の喪失であり、「個性化」も「差異化」として捉えられ、学校は「多様な人びとが異質の文化を交歓して共同の世界を構築する場所」としての機能を失い、「見知らぬ人びとが群れをなしてそれぞれの私的世界を生きる場所」とされる(p. 57)。

このような近代以降の学校の学びの問題は、課題の外部化、「私事化された学び」(内的な自己意識への沈潜), 「膨大な情報の断片の寄せ集め」, 「学びの意味や価値や必要」の「身体経験の実感から生成し発展する契機」の喪失とその抽象化とも捉えられる(『技法』p. 36)。なお、「個性化」については、「個性化」の強調は「個性化」の画一化となり、「教室の具体的な経験や実感から遊離してしまう現象」として「個性化」という逆説」が指摘される(pp. 44-45)。そのため、「個性化」は「差異化」, 「私事化」(p. 52)としてではなく、「存在論的な個性化」, 即ち「相互主体的な個性化」と捉えることが求められ、そこでは「一人ひとりのアイデンティティを他者との絆において形成し、個性的であることが同時に、共同体的な連帯を準備するような個人の存在論的なありようを探究すること」が重視されることになる。このような「自立」と「連帯」に基礎づけられた「個性化」が、「他者との関係に開かれた文化の創造と交歓への道」の獲得につながるとされる(p. 59)。ここに「公共性の再構築」(『カリキュラムの批評』)としての「学びの共同体」(p. 72)が関わることになる。

その際、「学びにおける身体性の回復」の出発点は、「学び手である子どもの身体の内処を確かにする」ことになるが(『技法』p. 20), 「学校のありさまを生きもののように表現」するものとして「子どもの声と身体」とともに「教師の身体」¹⁴が着目される(pp. 94-95)。なお、「声」が着目されるのは表情と同様「身体的表出」に他ならないからである(『教師というアポリア』pp. 201-202)。そして「子どもたちの身体の変異」(p. 135)が生理学的・医学的症状の問題としてではなく、「精神的な意味における身体の危機」の現れと捉えられる(p. 135)。その

具体例として、「人と交われない硬直した身体」, 「人まえに立つと萎縮してしまう身体」, 「感受性と応答性を喪失した身体」, 「硬い殻で覆われた自閉的な身体」, 「突発的に暴力と破壊へと向かう身体」, 「自虐的行為をくり返す身体」が指摘され、それに関わる「[「ダレイ」]「ムカツク」「イラダツ」「オチコム」「ネクラ」「カッターイ」]という「身体の兆候を表現する身体感覚の言葉」(p. 135)は、「身体性を喪失」(pp. 136)した「宙ぶりの身体」(p. 139)の表れとされる。この点については、「学びに専念している子どもの身体も、学びを拒絶している子どもの身体も、現実には、いくつにも引き裂かれているのではないだろうか」という認識として提示され(『技法』p. 20), その理由として「消費社会の記号化された欲望」の中での自我の肥大化あるいは「友だちや親や教師からのまなざし地獄」が指摘され、結果として「モノや人と交われない身体」, 「モノや人と繋がれない身体」, 「モノや人に応答できない身体」(同書, p. 28)という「浮遊し棄民化する身体」(同書, p. 27)あるいは「学びを拒絶し逃走する身体」(同書, p. 30)が生じているとも捉えられる。その具体例として、過剰に動かす身体あるいは過剰に動きまわる身体が、「一方的に「表出」し「発散」する身体」, 「「対応」する身体、あるいは「呼応」する身体を失った「不自由な身体」」であり(同書, pp. 44~45), このような身体の危機は、身体から想像力が排除された「身体」の「硬直化」とされる(同書, p. 196)。ここに身体が発しているメッセージの読み解きの技法の必要性が認められる。

「学び」における教師の身体について確認すると、「[「先生」を生きる教師は、制度化された「先生」の権力を身体化することによって、教師としての主体性と力を喪失している]という「教師が身体化している権力のパラドックス」が指摘される(『授業研究入門』pp. 80-81)。このことが「身体」の「硬直化」となり、それに関わる「教職生活の危機」として「学校の規範性と正当性の揺らぎ」, 「教育意識の私事化による学校の公共性の解体」, 「家庭と地域の崩壊に起因する子どもたちの発達と成長のゆがみ」という「三つの危機」があげられるが(pp. 153~155), 「教職の三つの特徴」としての「再帰性」, 「不確実性」, 「無境界性」(『教師というアポリア』pp. 94-100)からも教師の「存在論的危機の様相」が捉えられる(同書, pp. 12-18)。それとともに、教師の「学校という装置が枠づけ統制する教師の身体と、その教師が自分自身の世界を生きる身体感覚」, 「学校という制度を生きる身体と固有名を冠した自己を生きる身体」, 「一方的で直線的なカリキュラムの時間を生きる身体と可逆的で循環的な学びの時間を生きる身体」の間の亀裂から生ずる「教師の存在論的な危機」が指摘される(同書, p. 18)。このような身体の硬直化に対して「異質性が共存し特異性が発揮される連帯」(p. 100)が求められるとともに、「ケアリングとしての教育」(pp. 161~172)として「関係のなかで自分を生きること」, 即ち「教室と学校と社会のさまざまな関係において「教師としての自分を生きること」を中心とする実践」という「[「役割」から「関係」への転換]が求められる(pp. 170~171)。

この点については、「子どもと大人の双方の主体的な関係を前提」とした「対象の脆さや危うさに対応する「応

答的(responsible)な営み」としての「教育=educare」が提示される(『技法』p. 24)。これは、「教育という機能は、近代の社会が成立するまでは、暮らしや労働や祈りやケアや憩いや癒しなどの共同体のいとなみのなかに埋め込まれていた。近代の学校教育は、そのうち、知識や技能を伝授して能力を「ひき出す」という機能だけを抽象して制度化したのである」という認識からの「教育という機能」の捉え直しとなる(同書, p. 23)。そのために求められるのが、「私たち一人ひとりが生身の身体をとりもどすこと、あるいは、自分自身の身体を生きること」(同書, p. 82), そして「自分自身の身体を生きることによって他者と交わりあう身体と言葉を蘇らせること」であり、そこに「癒し癒される関係」が生成するとされる(p. 187)。「自分自身の身体を生きる」ということは、子どもの身体が「自分と世界との関わりを編みなおし、自分と仲間との関わりを編みなおし、自分自身を編みなおしながら育ちあっている」ということであり、このような「学びの身体」は「交わり育ちあう関わり」とされる(『技法』pp. 8~10)。そのため、「学びとは「モノ」や「こと」や「人」との関わりを、学び手の身体を投企して紡ぎあげる営み」とされ、「その営みを支えているのが、学び手の〈言葉〉であり〈身体〉となり、それは「学び手の言葉と身体が対象や他者に対して開かれ、瑞々しい生きたものとして働いている」ものとされることから(同書, pp. 13~14), 「学びとは、…、モノや人や事柄と〈出会い〉, 新しい世界や自分と〈対話する〉身体技法によって遂行されるいとなみ」となり(同書, p. 27), それは、「認知的(文化的)実践」, 「対人的(社会的)実践」, 「自己のあり方を探求する実存的(倫理的)実践」としての「モノ(対象世界)と他者と自分との対話的实践」であり(同書, p. 91), 「学びの三位一体論」とされる(『教師というアポリア』pp. 231-234)。

ここでは「具体的なモノ」や「教室外の他者」による「身体に喚起する想像力」が重要となり(『技法』p. 93), 「身体を投企して遂行される学びの場所の構築と学びあう関係の創出こそ、学びを身体の所作として復権する実践」とされる(同書, p. 37)。このような「学び」における身体の重要性は近世の「学び」において認められている。この意味で「学びの再生」は「学びの復権」といえる¹⁵。近世の「学び」は「効率性」, 「主体性」ではなく、「学び手の身の構え」や「身の型」という「身体の技法」を基盤に成立し、「自分とは異なる意見や沈黙した声に耳をすます」という「聴く」技法が重視されたとされる(同書, p. 16)。その典型例として、近代以降の学校¹⁶における「脱文脈化」, 「脱人称化」された組織化された学習に対して、「すべてが状況に埋め込まれており人称化」された「徒弟的な共同体での学習」¹⁷が指摘される(『教育方法学』p. 71)。

「学びの身体技法」である「自分の身体を生きる」ためには、「学び」の「場」としての「教室の時間と空間を編み直す」ことが重要となる¹⁸(『授業研究入門』pp. 58-84)。教室空間の問題は「権力空間としての教室」(同書, p. 65)というその「硬直性」にあり、それは「教師の身体」の「過度の緊張」と「子どもの身体」における「過剰な力」を生み出すとされる(『教師というアポ

リア』p. 234)。教室の時間の問題は「制度のプログラムを生きる時間」と「自分の身体を生きる時間」との亀裂（『学びの快樂』p. 105）に求められ、後者が「今ここを生きる時間」であるのに対して、前者は「一方向的で直線的」、「均質性」、「細切れの分断」を特徴とした「制度化された時間」となる（『授業研究入門』pp. 60-65）。その典型例として指摘されるのがメーハンの「教室言語」（I-R-E）となる（同書、pp. 74~81）。このような時間と空間に構成される教室での「教師と子どもの身体」は、「プログラム化された身体」として「制度を生きる身体」であり、それに対するのが「今ここ」での「「特異性」の経験」としての「「出来事」へと身体を開く」という「自分を生きる身体」となる（同書、pp. 81~84）。そのため、「教室の時間と空間を編み直す」（同書、p. 58）とは「授業のなかの言葉と身体を見直す」ことになり、それは「対話的關係性への第一歩」とされる（同書、p. 74）。その端緒として「教師の生身の身体から発せられる言葉」が着目される（『教師というアポリア』p. 355）。また、「授業は、所定の計画の遂行としてではなく、意図や計画からの「ズレ」の中に学びの可能性をたえず探り出し、その「ズレ」の中で成立する学びを織物のように編み直すいとなみとして展開するもの」とされる（『授業研究入門』pp. 83~84）。この過程が「対話」であり「ダイアログ」とされ、「対話的他者」としての教師が子どもの「個性と多様性」に対応し、「教室で生成される文化と社会の文化の媒介者（mediator）」となることが求められることになる（『学びの快樂』pp. 72~76）。これは、「現実性（アクチュアリティ）」、「特異性（シンギュラリティ）」、「身体性」、「共同性」の喪失という「学び」の「均質化」に対して、「一人ひとりの学びの差異化を通して教室に文化の多様性を実現すること」であり、「差異化し続ける学びの身体」という「学びの「身体性」」に基づいた「学びの共同体」となる（同書、pp. 111~113）。

これまでみてきたように、「学びの身体」とは子どもと教師の身体であり、そこには言葉と声という身体的表出が含まれ、子どもの身体を読み解くとは教師の身体を読み解くことでもあることから、「学びの身体技法」は子どもと教師の身体を「学び」から絶えず捉え直す試みと捉えることもできる。この点を教師の身体について確認すると、初任者と熟練教師の「子どもの身体に関する発話」についての「モニタリングの思考過程」の質的相違として、前者が「断片的な印象」を提示するのに対して、後者は「身体の動き」を「その場限りの印象」としてではなく「それ以前からの変化」として捉えるとともに、「子どもの学習の内的な状態の象徴的な表れ」として、「その授業の展開に一貫する問題の発見に結びつく方向で問題にしている」ことがあげられるが（『教師というアポリア』pp. 216-218）、「制度の中で身体化されたシステムやプログラムを個の身体の内側で破碎する〈主体の闘争〉」の実践という「教師への存在論的接近」が教師の身体を読み解きの技法となる（同書、p. 18）。

5. まとめ

これまで身体を読み解きの具体的成果を歴史、スポー

ツ、学校を例に確認してきたが、一般的・抽象的存在ではないそれぞれ固有の「生身の人間」の身体を読み解くことは、その身体と直接的に向き合うという「関わり」において可能となり、そこでは対象は相互主体性となる。その一つの実践的・理論的成果として、看護における個々の「生身の身体」を実践的・根源的に読み解いている西村ユミ(2018)『語りかける身体:看護ケアの現象学』（講談社学術文庫）¹⁹がある。本書では、「始源的で前意識的な層における〈身体〉と世界との対話および、この層における両義性を、その経験の内側から、つまり看護師の視線から細やかに記述すること」が試みられている（p. 55）。そこで本稿のまとめとして「語りかける身体」という身体を読み解きの論点について確認する。

「語りかける身体」は、「科学的な認識以前の「生きられた世界」（p. 44）である「〈身体〉の原初的地層」（p. 165）あるいは「〈身体〉固有の次元」（p. 210）において可能となる。それは、「人と人が関わり合う生のいとなみ」（p. 34）の中での「出来事」をそれぞれの「「生」の表現」（p. 26）として受けとめることであるが、それぞれの人に内在する能力や可能性は「日常の関わりの中で「引き出される」（p. 36）ということ、「似たような出来事でも決して同じ意味を持ち得ない」ということ（p. 33）、「何を地とするかによって同じ景色を見ていても見方が異なってくる」ということ（pp. 190-191）、即ち「いつまでも習慣化されないその都度の新たな出来事との出会いと、そこに生成されてくる経験が重要な意味を持つ」という認識が重要となる（p. 230）。

また、「見る主体と見られる客体とが明確に分離されてしまったとき、植物状態患者は他者との交流を閉ざされてしまうのである」（p. 43）という指摘は、「彼らをひとりの人として受け入れる素地」としての「植物状態患者と触れ合うこと、患者と〈互いに馴染む〉こと」（p. 148）の重要性に関わる。ここでの「触れ合う」「〈互いに馴染む〉」ということは、「同じ場を、同じ時間をともに生きることによってのみ可能となる共時的な経験」（p. 176）、即ち「二人の関係から紡ぎ出される「雰囲気」（p. 189）であり、「交流」の成立となる（pp. 198-207）。この点を確認すると、身体を読み解きのためには「対象」を「見る」ことになるが、「見る」という「対象」との「関わり」は「見る」側がその対象者の「見る」対象となっているという相互関係となるため、「見る」という行為は「見られている」ことが内在した相互関係的行為となるだけではなく、さらに「視線が絡む」あるいは「私が映っている」（第三章「1 視線が絡む」pp. 152~167）というより根源的な「関わり」の可能性を含むものとなる。ここでの「視線」は、「単に五感の一つである視覚の働き」としての機能ではなく、「視覚に限定されない感覚」としての働きであり（p. 156）、また、「私が映っている」という感覚（p. 160）は、「認識および聴覚、視覚という知覚が渾然一体」となった経験であることから（p. 157）、これらの表現は「見る」という行為が「〈身体〉に触れるという感覚」でもあることを示唆している（p. 159）。

このような「語りかける身体」という身体を読み解きの技法を手がかりに、「教師の視線」からの学校という

実践共同体における子どもとの「関わり」の中での子どもと教師それぞれの身体の読み解きの試みの可能性を指摘できる²⁰。学校における子どもの身体の読み解きの技法も子どもとの「関わり」の技法も日々の実践の中で構築されていくものであることから、日々の実践の場におく者の「直感」(「プライマリーナースならではの直感」pp. 72-73)や「可能性の実感」(pp. 78-81)が重要となり、それらは「近づけたかなと思う」(p. 126)あるいは「ものの見方が変わったというよりも、意識の持ち方が変わった」(p. 129)といった実践感覚といえる。なお、教室における教師と子ども一人ひとりの関係性においては、「一対多における個別性」が基本となるところに難しさと教師の専門性が深く関わることになるが、このような感覚を含めた身体の読み解きの技法の明確化は「実践の理論化」の試みとなり²¹、そこでは「方法としての身体論」²²という視座も重要となる。

注

- この意味で保健体育の「体育理論」における「文化としてのスポーツ」(中学校)、「スポーツの文化的特性」(高等学校)という視点が重要となる。「スポーツ文化」という用語については、杉山英人(1998)「研究領域としてのスポーツ文化」『千葉体育学研究』22, pp. 13-18参照。(https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/107181/S09138137-22-P013.pdf) 2022/9/14.
- 杉山英人(2020)「スポーツにおける「競争」批判の論点：B. ラッセルの競争批判に基づく競技と道徳性の関係性の一段面」『千葉大学教育学部研究紀要』68, pp. 33-43参照。(doi:10.20776/S13482084-68-P33)
- このことは、「教材としてのスポーツ」という論点の重要性を示している。杉山英人(2017)「教材としてのスポーツ考：その基本的枠組みに着目して」『千葉大学教育学部研究紀要』65, 215-225参照。(https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/104447/S13482084-65-P215-SUGI.pdf) 2022/9/15. なお、近年では「伝統的な体育プログラム」とされる、いわゆる「一斉授業(“one size fits all” approach)」とは対極にある、あらゆる児童生徒に対するバランスのとれた包括的なカリキュラムの機会均等を保障する、「身体リテラシー(physical literacy)」に着目した「QPE(quality physical education)」(「質の高い体育」)の重要性が指摘されている。“what is QPE?”(https://www.un.org/development/desa/dspd/wp-content/uploads/sites/22/2021/02/QPE-publications-2021-launch-overview-ext_01021.pdf) 2022/9/15.
- 「身体の文化性」については、杉山英人(2009)「実践的身体論：身体における文化性」『体育哲学研究』39, pp. 61-67参照。
- 次を参照。杉山英人(1999)「身体教育の射程」『千葉体育学研究』23, pp. 9-16。(https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/107186/S09138137-23-P009.pdf) 2022/9/14. 杉山英人(2001)「教育における身体性」『体育原理研究』31, pp. 69-79. 杉山英人(2002)「身体教育論序説：教育における身体性に着目して」『千葉大学教育学部研究紀要』50(I), pp. 91-103. (https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900026720/KJ00004185191.pdf) 2022/9/14.
- 「体育の対象としての身体」については、杉山英人(2022)「体育の対象としての身体再考：矢田部英正の身体へのまなざしに着目して」『千葉大学教育学部研究紀要』70, pp. 87-97参照。(https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900120447/S13482084-70-P087.pdf) 2022/9/5. 身体の読み解きに関しては、存在様態としての「佇まい」が重要な論点となる。
- 競技者の身体の読み解きについてはコーチングにおける蓄積があり、また、柴田輝明(2016)『跳び箱に手をつき骨折する子ども：子どもの「運動機能の低下」の実態』(ポプラ新書)において、現代の身体を巡る状況である「二極化」に関する「子どものロコモ」(p. 12)という新たな問題とそれに関わる身体の読み解きの指標として「歩いているときの姿勢」である「歩容」(p. 35)の重要性が指摘されているが、本稿で考察する身体の読み解きの技法は、子どもの存在様態の理解という点で身体の教育を専門とする体育教師だけではなく、教師一般に求められるものである。
- この論点に関しては次を参照。A. コルバン他監修・G. ヴィガレロ編／鷺見洋一監訳(2010)『身体の歴史Ⅰ：16-18世紀 ルネサンスから啓蒙時代まで』(藤原書店), A. コルバン他監修・A. コルバン編／小倉孝誠監訳(2010)『身体の歴史Ⅱ：19世紀 フランス革命から第一次世界大戦まで』(藤原書店), A. コルバン他監修・J-J. クルティエヌ編／岑村傑監訳(2010)『身体の歴史Ⅲ：20世紀 まなざしの変容』(藤原書店), A. コルバン他監修・G. ヴィガレロ編／鷺見洋一監訳(2016)『男らしさの歴史Ⅰ 男らしさの創出：古代から啓蒙時代まで』(藤原書店), A. コルバン他監修・A. コルバン編／小倉孝誠監訳(2017)『男らしさの歴史Ⅱ 男らしさの勝利：19世紀』(藤原書店), A. コルバン他監修・J-J. クルティエヌ編／岑村傑監訳(2017)『男らしさの歴史Ⅲ 男らしさの危機?：20-21世紀』(藤原書店)
- 杉山英人(2015)「書籍紹介：池上俊一(2001)『身体の中世』(ちくま学芸文庫)」『日本体育学会体育哲学専門領域会報』19(3), pp. 3-4参照。(http://pdpe.jp/kaihou/annual2015-3.pdf) 2022/9/14.
- 現代の身体の読み解きの代表的事例として鷺田清一の『悲鳴をあげる身体』(PHP新書, 1998), 『ちぐはぐな身体：ファッションって何?』(ちくま文庫, 2005), 『モードの迷宮』(ちくま学芸文庫, 1996)がある。また、現代社会の子どもの身体状況を「ムカツク・キレル」と読み解き、生活に密着した伝統的身体文化・技法を「腰肚文化」と捉え、そこから子どもの身体状況の変容を実践的・理論的に試みているのが斎藤孝である。杉山英人(2001)「教育における身体性」『体育原理研究』31, pp. 69-79参照。
- 杉山英人(2017)「書籍紹介：多木浩二(1995)『スポーツを考える：身体・資本・ナショナリズム』(ちくま新書)」『日本体育学会体育哲学専門領域会報』21(1), pp. 4-5参照。(http://pdpe.jp/kaihou/21-1.pdf) 2022/9/14.
- この論点は「公平性(fairness)」に関わる。その一

- 事例として次を参照。Olivier Guibertau(2022) “The Ghost Runner: John Tarrant’s story of triumph and tragedy” (23 August 2022 <https://www.bbc.com/sport/62607571>) 2022/8/24.
- 13 このことは現在の競技スポーツにおける「公平性 (fairness)」と「包摂 (inclusion)」の関係にも関わる。次を参照。“Testosterone rules for female athletes ‘unscientific’ (21 March 2019, <https://www.bbc.com/news/health-47640359>) 2022/9/15. “Fina bars transgender swimmers from women’s elite events if they went through male puberty” (19 June 2022 <https://www.bbc.com/sport/swimming/61853450>) 2022/9/15. Dan Roan(2022) “Transgender athletes: Lord Coe hints athletics could follow swimming in banning trans women” (20 June 2022 <https://www.bbc.com/sport/athletics/61865789>) 2022/9/15. Dan Roan(2022) “British Triathlon becomes first UK sport to create ‘open’ category for transgender athletes” (6 July 2022 <https://www.bbc.com/sport/triathlon/62063359>) 2022/9/15. “World Triathlon approves transgender policy with tighter regulations” (4 August 2022 <https://www.bbc.com/sport/triathlon/62418165>) 2022/9/15.
- 14 斎藤孝 (1997) 『教師＝身体という技術：構え・感知力・技化』(身体関係論1, 世織書房) 参照。
- 15 辻本雅史 (2012) 『「学び」の復権：模倣と習熟』(岩波現代文庫) 参照。
- 16 近代日本の学校の問題点として、国語と体育を通じた「在来的で土着的な言語と身体」の「標準化した言語と身体」への変換による「均質性と画一性」があげられる(矢野智司 (1988) 「生成と発達の場としての学校」佐伯胖他編『学校像の模索』(岩波講座2 現代の教育：危機と改革, 岩波書店, pp. 114-115)。また、「読み書き算の3R's(生活の実用)の組織」が出发点とされる近代の学校の特質の一つとして「ナショナル・アイデンティティ」の形成が指摘されているが、その内容として国語、道徳、歴史とともに「体育」があげられている(『教育方法学』p. 109)。このことは、身体の育成が当該生活圏での文化性の獲得であることにも関わる。このような体育に対して「共通教養」を追求する「普通教育」(七領域)としての「身体の教育」(「身体の運動と保健の経験」)は、他の領域同様にそれに対応する教科に限定されず、「生理学的な身体を対象とするだけでなく、精神的・文化的存在としての身体を対象とし、言語、芸術、科学、社会、技術に関わる総合的な内容を含んでいる」ものとされる(『学びの快楽』pp. 188-190)。例えば、言葉に関しては、「そこでの経験をもっとも的確にかたどる言語」を探求するという「言語的实践」が求められている(同書, p. 236)。
- 17 この点については、生田久美子 (2007) 『「わざ」から知る』(コレクション認知科学6, 東京大学出版会) 参照。
- 18 「からだ」を基点に「教室」を読み解く試みとして、庄司康生 (1995) 「IVからだを通して教室を見る：制約から可能性へ」佐藤学編『教室という場所』(教育への挑戦1, 国土社, pp. 120~154)があり、「からだ」とともに「ことば」、「声」、「対話」、「ふれるということ＝ふれ合い」、「教師自身が「からだ」として“今”を生きること」が着目されている。
- 19 次も参照。西村ユミ (2007) 『交流する身体：〈ケア〉を捉えなおす』(NHKブックス)
- 20 本書の構成は、「第一章〈植物状態患者の世界〉への接近」「第二章 看護経験の語り」「第三章〈身体〉を介して交流する看護ケア」「第四章 臨床のいとなみへのまなざし」となっているが、それぞれ「子ども(の世界)への接近」「教師経験の語り」「〈身体〉を介して交流する授業」に、そして「臨床」を学校、教室、授業に読み替える可能性を有している。
- 21 G. ゲバウア(2019) 「第10章 ドイツにおけるスポーツ科学：歴史と展望」, 樋口聡, グンター・ゲバウア, リチャード・シュスターマン『身体感性と文化の哲学：人間・運動・世界制作』(勁草書房)pp. 287-297参照。
- 22 樋口聡 (2005) 『身体教育の思想』(教育思想双書7, 勁草書房)pp. 16-31参照。